

## 解答

□

問一 a 一笑 b 担（いで） c 解除 d 無我夢中

問二 A イ B ア C エ D オ

問三 i エ ii イ

問四 ウ

問五 集団で ・ 何かに

問六 弱みを見せると何をされるかわからない子供の世界の中で、自分の感じている怖さをさとられるわけにはいかないと思ったから。

問七 健一は、鉄橋を渡ることへのあまりの恐怖に狼狽しているが、明は、線路の下に入って何とか難をのがれたことで緊張から解き放たれ、放心している。

問八 イ

□

問一 a 注（ぎ） b 衛生 c あやま（ち） d ろうきゅうか e 未練

問二 イ

問三 これまで人間関係によって積み上げてきた、物品や道具とのつながりを失ってしまった。

問四 ア

問五 ウ

問六 人間関係のおそろべき荒廃

問七 報酬

問八 機能として与えられたものを、物品そのものであるかのようにとらえてしまうこと。

問九 イ

## 解説

□

問二 それぞれ次のような意味になるよう適語を入れます。

A 「偶然」それを見ていた。

B 「いつのまにか（知らないうちに）」なくなっていた。

C まったく気持ちの余裕がなく、鉄橋を渡ることに、「集中」している。

D 「いつも以上に」男らしく見えた。

問四 冒頭「中学生の穀が…」とあることをおさえます。そもそも他の「ガキども」とは異なる年長者の穀自身が始めた危険な遊びです。それがもとで人が出たことの責任を問われることを恐れたのです。

問五 ひとりではできないことも、集団になると平気でやってしまうことがあります。冷静さを失い、善悪などの判断ができなくなった時の様子を「狂気」と表現しています。そのような子供たちの異常さが表れた部分をさがします。

問六 傍線③の7・8行前の「子供の世界くわからない」に注目します。吉岡兄は、ここで「弱み」を見せるとどうなるか当然わかっているはずです。ですから「怖い」ということを、どうしても認めるわけにはいかなかったのです。

問七 いわゆる「血の気の引く」状態です。健一については傍線④以前の状況説明から、鉄橋を渡ることへの恐怖、しかも「狼狽」するほどの強い恐怖であることが読み取れます。一方明は、自らの機転で間一髪命拾いしたことで、極度の緊張から解放され放心状態になっています。

問八 遊びを通して「子供の世界」が二つのエピソードによって語られています。ときに危険を冒しながらも、子供たちならではの人間関係がつくられ、その中で彼らが成長していく様子が描かれています。

□

問二・問三 傍線①「神の息吹として」を言いかえれば、直前の「実体として」。そして「実体」とは、コップの例でい

えば「何人もの」という歴史」によって「つくりあげ」られた「ほんとうのものとしてのコップ」です。(問二)と  
ころがいまは「機能的」であることと引き換えに「歴史」や「実体」を失ってしまった、と述べています。(問三)

問四・問五 筆者は、便利なほうが「いいにきまっている」が行き過ぎてはいけない、と述べています。建築(都市)  
でいえば、便利であっても住みにくければ「何のための便利さか」ということになってしまいます。「二律背反」

(問四)にならぬよう「あちら(便利さ)」と「こちら(住みやすさ)」とのバランス(調和)が大切なのです。

問六・問七 「使い捨て」が招く結果を傍線⑤の二行前で『使い捨て』の報酬」と皮肉を込めて筆者が述べています。  
これをAに入れて、その一文を読むと「人間く荒廃」イコール「報酬」であることがわかります。

問八 問二・問三で見た「便利さや機能にあたるもの」と「歴史がつくりあげた実体としてのもの」とを傍線⑥にあて  
はめると「つぎ」は前者に「原形」は後者にあたります。

問九 最後の段落に注目します。便利さや機能を追求するあまり、「いちばん大切なもの」であるはずの「歴史」を捨て  
ている今の社会に対し、筆者は強い危惧を持っています。本文前半に「人間は便利さのためばかりに生きているの  
ではない」とも述べられています。